

エッセイ 吉村皓月

華道
（洗心雲林派三代目宗家）

私は、戦後間もない農家の五男として生を受けました。家は代々、米や麦にサツマイモなどの作物を育てていました。周りも農家ばかりの高台にあり坂を下ったところを菊池電車（電鉄）が東西に走り、西に上熊本駅を望む景勝の地です。私が物心ついた頃、祖父は作物を花の栽培に切り替えました。当時は戦後復興から高度経済成長へ向かう時期でもあり、思えば祖父には先見の明があったようです。

その花農家への転換は、私の人生に大きな影響を与えました。四歳の頃だったと思います。出荷前のチューリップの花が整然と雁首をそろえて立っているのを丁寧に摘み取ってしまいしました。それを見た父の怒りの形相に驚き、縁の下に潜り込み夜になっても出ることができず、母が黙って差し出した手を泣きじゃくりながら掴んだことは今も忘れられません。末っ子だった私は、常に両親のそばを離れず、田畑に出かけるときも一緒。そのうち花の植え

付などを自然に手伝うようになり小学三年頃には花束ねもできるようになっていました。花束ねは、その束ね方で値段に開きができました。出荷する時は簗を敷き、稲で（イナゴで結束五十本束を菰巻きにして大束を作りますが、この時、束ねられた花の笑顔が見られるようにするので。その技を門前の小僧のごとく自然に

花・いけばなとの出会い

会得することができました。夜のうちに花束ねを行い、翌朝ほの暗い庭に朝日が差し込みますと一層花があでやかになり、ヨーシ！出荷するぞ！と奮いたちます。

昭和三十五年ごろからは、農家でも機械化が進み、農耕馬から耕運機にとって代わりました。しかし同時に農家の機械化貧乏の時代も始まり、そのような両親の苦労など子供の私には知る

よしもなく、機械いじりをすることでその仕組みに引き込まれ、時間を忘れて分解整備をしていたのを思い出します。いつしか私は技術系に進むことになっていました。この技術者としての経験がいま、古典生け花の取り扱いの基につながっているように思います。

昭和四十年代になると日本経済の成長に伴い多くの若者たちがスポーツやレジャーを楽しむ、茶道や生け花は、

多くの女性が花嫁修業の一つとしてたしなんでいました。生け花人口全盛期で熊本だけでも三十五流派ほどありました。友人から「生け花を出品しているのを見て来ないか」と誘われ元大洋デパートの六階の催事場に行きました。そこには百五十瓶ぐらいの生け花が所狭しと並べられてあり、どの花も見えてくれる人を見ていたかのようにも見えて、そ



カット・正村タカシ

の美しさと端麗な姿に感動しました。その中でも私の心を強く掴んだのは、初代宗家楮原皓月先生の生け花でした。花材は臥竜梅（ガリヨウバイ）でしたが、方形の砂鉢の中の水を川と見立て兩岸の岸辺から養分をたっぷり吸い取った木々の枝が垂れ下がり、水の中をくぐらせた枝がさらに勢いを増して立ち上がる様を表現したものでした。方形の砂鉢は東西南北つまり地球を意味し、生として生きるものの象徴として臥竜梅がそこにありました。初めて見る世界に大きく心が揺さぶられ、そのまま生け花の世界に飛び込みました。

華道洗心雲林派に入門し四十八年、よく継続したものだと思身感心しています。入門当時、板張りに

一（二）時間も正座してや々と活けると、先生は花の根元を掴み竹器ごと持ち上げられます。花が正確に入っていないと崩れてしまい、何度もやり直し、時には稽古花を捨てて帰ったこともありました。花を正確に入れる技術は、機械を正確に組み上げる技術と似ているところがあります。家元より「生け花とは植物を主材とした空間芸術である。草花や枝物が育った環境や季節の移ろいを感じさせることが大事である。」と教わります。頭ではわかっているものの、いざ花に向かうとその難しいこと。少しずつ植物とはどんな所にあるか、育つか、環境は、種類は、姿、形、この千差万別のもを如何に組合せ、調和させて作品化するか…。

色はもとより線、面、塊、つまり形の三要素と言って重要視されます。特に色に対して人の目は百二十万種も識別することができると言われています。この難しい課題に挑戦する機会を得たことと花に囲まれ、花を通して多くの出会いがあり、心より感謝しています。

エッセイ

中 尾 富 枝

(文化一般・元荒尾市議会議員・女性史サロン・あらお代表)

恒例となった兄妹会が六月にあった。その兄妹会の二日目の二次会を始めようかという時に、次兄が目を見開いて言った、「富枝くん、実家が変わったよ」次兄は珍しく二日前に来て実家に泊まっていた。二日後レンタカーに乗って墓参りに出掛けた。菩提寺に参って実家に行くのである。

私の生家の方では屋敷内に数枚の畑があってその家屋敷を取り囲んで防風、防雪の木が植えられている。その屋敷林はイグネと呼ばれる。東北地方独特の風景である。木はほとんどが杉である。家屋敷の入り口を

門口もんぐちと言っていたが、レンタカーが門口に着いて我が家を見ると、母屋の屋根の上に伸びて見えていたイグネが見えなかった。車から降りて早速家の裏に回って見た。我が家のイグネは屋でも陽が差し込まないほど

太く高く茂っていた。イグネは母屋の裏から西側一面をガードするように植えられていた。子供にとってイグネは立派な森だった。明るい母屋の前方とは別天地の異空間であった。

杉の根元には笹が密生していた。笹の中に目を凝らすと、初めて見る三、四十センチほどの祠が並んでいた。

移ろい行くもの

水木の大木が悠然と空に向かっていた。その大木はオレンジ色の脂を流していて気味が悪かったが春には真白な花を沢山つけた。

「実家が変わった」珍しい次兄が語気を強くして言ったのは、兄も慣れ親しんだイグネが一本残らず切られて無くなったということだった。飄々としているように見える兄も

ショックだったのかなと思ったが、よくよく聞いてみると木の伐採は業者に頼んだものの、その後の広々とした跡地を整理し雑草が



カット・正村タカシ

生えないように分厚いシートを敷き詰める作業を一人でやり遂げたという甥に対する讃辞であるらしかった。実業家の兄は甥の労力を称え、私は思い出の多かったイグネに思いを馳せた。切り倒された杉の木は八十本を下らなかつたという。

思い出の場所は、外にもある。町史によれば甥の代で十代目であるという生家は、古色蒼然たる家だった。廊下を南から西に回って北に曲る角の所に、何年も誰も出入りしない納戸があった。電気もない広々とした部屋には何代分かの荷が重なり合っていた。その中のタンスを開けて見たことがあった。掻き回した手に髑かみしが引かかって、出て来た時は全身が凍りついた。分厚い漢和辞典が出て来た時は、見知らぬ先祖への畏敬の念が沸いた。

わが家の門口の近くに熊笹が繁った一角があって、そこでは遊ばないように言

われていた。家族はそこをオデッサマと呼んでいた。「お大師さま」が訛ったものかなと一人合点していたが、甥が調べたところによると「武烈天皇」を祭ったものということだ。武烈天皇は第二十五代天皇で、暴虐な振る舞いが多かったといわれている。秋の収穫が終わった頃オデッサマに神樂が奉納され夜になると、わが家の庭に急ごしらえの舞台が架けられて夜神樂が始まる。大蛇がトグロを巻き様々な面をつけた舞い手が絢爛たる衣装で乱舞する。天井の太い太い梁はマサカリで荒削りのままなのに床の間は漆が塗られていて、その床の間には美しい色合いで描かれた、今思えば来迎図の掛軸がよくかけっぱなしになっていた。来迎図には、十人以上の天女が雲に乗って降りて来ていた。家を守ってくれた九十一歳と八十九歳の長兄夫婦も、軸の絵のようなお迎えが頂けるといいのだが――。